

浮世絵動物園

太田記念美術館(神宮前) 22.07.30~08.28(前期) 09.02~09.25(後期)
前後期で全作品の展示替えあり。



「浮世絵」には、ペットを溺愛する今と変わらない人々の姿が描かれている一方で、犬に魚を盗まれる魚屋や馬に乗った旅人など、現在では見られなくなった人と動物の暮らしぶりも伝えてくれる。さらに日々のあらゆる一コマを切り取る「浮世絵」では、木菟(ミミズク：フクロウの一種)を描いて、疱瘡除けの効果を期待した「疱瘡絵」や、飼い主のかわりに伊勢参りをしたと伝えられる「犬の姿」も描かれている。

本展では、現代人の想像を超える**“動物たちの様々な活躍ぶり”**が紹介されていてまことに興味深い。

「疱瘡絵」は、江戸時代に流行した疱瘡(天然痘)に罹患しないように、また罹患しても早く軽くて治癒するようにとの祈りを込め、玄関や家の中に貼ったり、病人の枕元に置いたりして護符かわりに用いた「木版画」のことである。

鈴木春信 《猫に蝶》 中判錦絵 前期 1765~70(明和2~7年)頃



「猫と蝶の組み合わせ」は、中国では長寿を表わす吉祥モチーフとして好まれ、猫の愛らしさに職人技、そして、おめでたさも盛り込まれた作品である。

猫の姿が、輪郭線を省いて柔らかな体(ふっくら)としているのは、和紙の厚みを利用した「きめ出し技法」で立体的に摺られたもので、上部左右が黒く変色しているのは、牡蠣殻を粉末にした白色顔料(胡粉)が酸化したため、ある種の味わいとして珍重されている。

月岡芳年 《風俗三十二相 うるささう 寛政年間 処女の風俗》後期 1888年



画伯が50歳時に発表した「浮世絵の美人画錦絵の連作品」で、モデルは10代前半らしき女の子で、燈籠髪に島田髷のヘヤースタイルに、びらびらしたかんざしや赤い布を付けた若者らしいファッションである。同じ鹿子布を猫の首輪にしているところを見ると、彼女のお気に入りのペットのようである。江戸時代には、さまざまな動物がペットとして大切に可愛がられていたが、その中でも代表的なのは何とんでも「猫」であったといわれている。